

みえない世界のことを

河 辺 杲

暑かった夏の終りのある日、劇団「風の子」の演ずる「ぼくのなかのぼく」という作品を観劇していろいろ感じさせられた。この作品は身体のしくみを通して人間のあり方をさぐるというテーマで今こそ生きることのすばらしさを子どもたち（大人もふくめ）に訴えたいという願いがこめられていた。近年子どもたちの身体にいろいろな変化が見られ、幼稚園でころんでも手が働かなくて顔をぶっつけてしまふ子、ちょっとしたことですぐ骨折をする子などが見られたり、また神経性胃炎の子どもが年々増加しつつあることなどが小児科医によって報告されている。子どもは一体どうなっているのかという問題への警告とも受けとれた。この作品ではA少年が学校の校舎から落ちるといふ事故を契機にこのA少年のからだのしくみについて探究をはじめ脳

の機能から神経や精神の働きにまで及んで身体と心のつながりについてこれを発見し理解していくという筋書きであった。こう言ってしまうえば生理学入門のようであるが、例えば私たちが立ったり坐ったりしているということに全身四百幾らかの神経がとっさに統一的に働くということの不可思議さを考えるとはじめに立つという気持ちがあり、その気持ちはさまざまに立つという動作は情緒の表現だとも考えられることに気づかせようと演出に苦心がなされていたところに感動したのである。

すなわち、みえている世界としてのからだの働きとみえない世界としての心の働きのつながりの問題に迫ろうという極めて意欲的、画期的でまた新しい演出の創意に溢れる作品に児童文化の今日性をあらためて考えさせられると共に観客の中の子どもたち

の反応ぶりからこの真剣なとりくみによって子どもたちをして自分のからだや生命の大切さに気づかしめるに充分であったように思われた。

ひるがえってこの「みえている世界」と「みえない世界」の両分野のバランスやつながりについて教育や保育に即して考えてみると最も弱く不足しているのではないかと考えさせられたのである。

この作品の中では六、七人の演者がそれぞれA少年の心の色を表現し、ゆれ動く心の葛藤場面を演出していた。そこにはサイコドラマやロールプレイの原理に近い状況が見られた。

保育実践の場でも「その子どもの立場になってみる」という人間理解のあり方が屢々問題となっているが、なにかそれへのとりくみにもう一つ手の届かないもどかしさを感じるのには私だけであろうか。子どもと保育者の関係においてだけでなく、子どもが人間関係を学んでいく過程でこのことにもっと深い探求が必要のように思う。

いまひとつこれに関連して考えられることは「他

人受容」については考えられても「自己受容」についての追求が弱いのではなからうか。相手の心もちが感じとれるためには先ず自分自身の心の動きがキヤッチされなければならない。一度各自が自分の感情についてどのように話しているか。また他の人々が自分の感情についてどのように言っているのかをよく気をつけて聴かしていただいたらどうだろうか。「感情を抜きにして理性的な話し合いをしよう」とか「客観的にならう」とか「感情をむき出しにしないで」などと言って何とかして自分の感情を無視するか否定することに非常な努力を重ね、また他人の感情をも無視するか否定するかしようとして一生懸命になっているのではなからうか。感情の否定や無視は感情をコントロールすることもあきらめることになっ

ているのである。
一九八四年を送るにあたり、静かに「見えていない世界」や「自己受容」について再確認し、新しい年への課題としたいと思う。

(洗足学園短期大学)